

---

# 真那浦南の不発弾(ダット・ボーイ)

史郎院彼方

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真那浦南の不発弾ダット・ボイ

### 【Zコード】

N1977Z

### 【作者名】

史郎院彼方

### 【あらすじ】

百九十一センチという身長と、生まれつきである栗色の髪、前髪で顔の右半分を隠すなど、身体的特徴が多い十五歳の少年、雪村春。

父が職場で栄転を果たしたことで、生まれ育った奈良を出て、  
神奈川県真那浦市に引っ越し、真那浦市南部にある真那浦南高校に  
入学した。

中学時代を思い出しながら、春は切に願っていた。

「楽しくなくたってええわ。平和に過ごせたらそれでええ……」

だが、ある出来事がきっかけとなり、春が新天地での高校生活にかけた望みは、入学から僅か一ヶ月と数日で、グラグラと揺らぎ始めていく……

「一緒に帰らない?」（前書き）

初めまして、史郎院彼方と申します。  
今回、初めての小説執筆＆投稿となります。  
駄目な部分ばかりでお見苦しいものになるとは思いますが、よろしくお願いします。

「一緒に帰らない?」

5月も半ばとなつたある日……神奈川県真那浦市<sup>まなうら</sup>の真那浦南高校……

朝の教室で、雪村春は誰とも話さず、窓際に一人佇み、ボンヤリとした表情で窓から見える景色を眺めていた。周囲の生徒たちは、そんな春に近づき難いのか、談笑しながら遠目にチラチラと見ることはあるが、話しかけようとすると者はいなかつた。ただ一人を除いては……

「おはよう、雪村くん」

「おはようさん……」

背中越しに聞こえた挨拶に対し、春は振り向きもせずに小さな声で挨拶を返す。そんな春を見て、挨拶をした女生徒……北見愛奈は優し気な笑みを浮かべた。

「……とりあえず、連絡事項はこんなところだ……じゃ、解散」  
春のクラスを担当している、黒いスーツを着崩した女教師、浜崎のやる気の無い一声を受けて、生徒たちは自由に動き始める。席に着いたまま勉強道具を広げる者、帰り支度を整える者、部活動に向かう者と様々だ。

部活動に参加しておらず、勉強熱心でもない春は、今日出された課題をするのに必要な物だけを鞄に入れて帰ろうとしていた。

「あの、雪村くん?」

春が教室の入り口まで歩いたところで、背後から声をかけられる。

「……なんや?」

「一緒に帰らない?私たちと……」

振り向いたところにいたのは、太陽のよつな笑顔の愛奈と、背

が低く目付きの鋭い女生徒だった。

（まさか……俺が誘われるやなんて……）

内心、非常に嬉しかった春は、いつもは無愛想な印象を『』える暗い表情が、少しだけ明るくなる。

「え……えつと……」

返事をしようとするが、思わず吃つてしまい、視線は宙を泳いでしまう。

（な、なに吃つとるんや俺……”ええよ”って言えばええだけやんあ、でも……）

一度は帰宅の誘いに応じようとするが、その瞬間、ある景色が春の頭に浮かぶ。その景色は、自宅への帰り道とは反対方向にある大きな鉄橋と、鉄橋の真下の河川敷だった。

「……今日は……ちょっと、用事があるんや……」

少しだけ考えてから、春は小さな声で『』う言つと、愛奈たちに背を向けて教室を出て行く。

「あ、ちょっと……」

すかさず愛奈が声をかけるものの、春は足を止めずに廊下を進んで行つた。

「なんなのアソッ? 愛奈の誘いを断るなんて……愛奈?」

背の低い女生徒が不満気に呟いて、隣に立つ愛奈を見上げる。

愛奈は春が出て行つた教室の入り口に視線を向けたまま、ボンヤリとしていた。

「ちょ、ちょっと……なにボーッとしてるのよ?」

声をかけながら女生徒は愛奈のスカートの裾を引っ張るが、愛奈には聞こえていないのか反応が無い。そんなやり取りを、教室に残つた生徒たちに見つめられたまま、時間がだけが経過していくのだった。

「なあ、あれ……雪村だよな？」

「うん、雪村くん……だよね？すげえ高いし、髪型も……ちょっと”あれ”だし……」

校門近くにいる生徒たちは、ヒソヒソと、内緒話をするよつて口元を隠して話していた。そんな彼らの視線の先にいたのは……

「北見……また誘ってくれへんかな……」

高校生活は、楽しくなくても平穀であればいい……そう考えていた春だったが……

「一緒に帰らない？」

愛奈の言葉が脳裏をよぎる。中学時代の自分に決してかけられず、高校でも自分には無縁と思っていた言葉が、春には単純に嬉しかった。

朝、教室で会つたびに”おはよう”と囁いてくれる。多くの人にとってはあまりに些細なことかもしれないことも、内心では大喜びしてしまう春にとつて、一緒に帰らないかと誘われたときの嬉しさを、心の中にしまつておくことは出来ず、表情は緩み、思わず鼻歌まで歌つてしまうのだった。

普段の春の印象からはあまりにかけ離れたその様子に、周囲の視線を集めてしまっていたが、少しも気にすることもなく、春は学校をあとにするのであった。

「やつぱ……かわええなあ……」

「……あ、あれ？」

放課後の教室……春が教室を出てから、しばらぐボンヤリとしていた愛奈は、ハッと我に帰り、辺りをキョロキョロと見回す。

「……大丈夫？ いつたいどうしちやつたの？」

心配そうな表情を浮かべながら、隣に立つ背の低い女生徒は愛奈のスカートの裾を掴んで愛奈の顔を見上げる。

「あ、加奈江ちゃん……私……」

「まつたく……その立派なお胸様をこいつ……モリモリ……つてしても、まるで反応が無いんだもん。ちょっと心配しちやつたわよ」

キヨトンとしている愛奈のスカートから手を離した、加奈江と呼ばれた女生徒は、両手を少し前に出して、胸を揉む仕草を見せる。

「？……も、もお……！ それやめてって言つてるのに……」

加奈江の手の動きを見て、愛奈は頬を赤らめながら、腕で胸元を隠す。

「テへへ……相変わらず、可愛いリアクションしてくれますなあ……」

愛奈の反応を見て、加奈江は新しい玩具を手にした幼子のよつな笑みを浮かべつつ、その表情に似つかわしくない下卑た笑いを漏らした。

「……バカア……もう知らないつ」

頬を赤くしたまま、加奈江を置いて一人早足で、教室を出て行く。

「アハハ、ちょっと待つてよお……」

そんな愛奈を追つて、加奈江もまた早足で、教室を出て行くのだった。

「……あいつら、なんも変わりないとええんやけど……」

春が買い物客で賑わう商店街を抜けて少し歩くと、あまり年季の入っていない鉄橋の前に辿り着く。

かつてこの地を治めていた戦国武将の名前から、あさあはし 麻芽橋と名付けられた鉄橋。利保川を境として北部と南部に区切られた真奈浦市……この鉄橋は、その二つを繋ぐいくつかある橋の一つである。

春は落ち着きの無い様子で周囲を見渡す。これから自分の行動を、街の者ならともかく、真奈浦南高校……通称”南高”に通う者には見られたくないからだ。特に、自分に声をかけてくれる唯一のクラスメイトには……

（前後左右、よう確認して……と……）

真奈浦南高校の生徒であることを示す紺色のブレザーが見えないことを確認すると、そそくさと河川敷へ下りて行った。

「……よう、元気やつたか？」

河川敷へ下り、麻芽橋の真下に位置する場所に来ると、春はそこにいた、一匹の猫に声をかける。一匹は三毛猫、もう一匹は黒猫で、一匹とも雌の成猫であった。そんな一匹の猫に向けて発された声は小さいものの、普段とは違い、とても気さくな印象を感じさせる。

春に気付いた一匹の猫は、特に警戒した様子もなく、春の足元に近づいてくる。

「やつぱ……かわええなあ……」

春はその場にしゃがみ込むと、近づいてきた一匹の猫の頭や背中を撫でる。撫でられた猫は、黒猫は目を細めながら「口」口と喉を鳴らして喜びを表現し、三毛猫は特に気にもしない様子だが、たまに撫でる手を離すと、それに抗議するように身を寄せてくる。

「また、家に帰るのが遅なつてしまうな……」

猫たちを撫でながら、春は小さく笑みを漏らした。

「退屈だあ……」

商店街の中にひつそりと存在する小さな古本屋の中…… 桜庭冬樹はさくらばるひなきふゆきは立ち読みに興じながら、溜め息を吐いた。

この古本屋には若い者が滅多に来ない為、ほとんどの客は、初老をとうに過ぎた昔からの常連客である。そんな彼らの一部に、珍しいモノを見るような目で見られていた冬樹だったが、それは、若い客がいる珍しさだけでは無い。黒いニット帽を被り、赤色のパークーの上から南高のブレザーを着たその体は、どこの力士かと思われるほど大きく、力強さを感じさせる体躯をしていたのだ。

「あー……駄目だ。今日はもう帰るか……」

小さく独り言を呟きながら、冬樹は読んでいた本……数学の参考書を本棚にしまい、出口に向かう。

（つたく……口クの野郎、三年になつた途端に、つれなくなりやがつて……）

「…………クソッ…………ホント、つまんねえ…………」

古本屋の出口まで来た冬樹は、一言だけそつ漏らすと店を出て行くのであった。

「…………」「？」

利保川の河川敷で猫たちと戯れていた春だったが、ふとあることに気がついて、猫たちを撫でる手を止めた。

「そういうば……名前、つけてへんなあ……」

猫たちから手を離して、春は考え始める。

（三毛猫がミケで、黒猫がクロ……いやいや、それやどりゅうと……）

地面をじっと見つめたまま、春は深く考え込んでいく。猫たちは、撫でるのをやめたのが不満なのか、黒猫は後ろ足で立つて春の右足の脛に前足でしがみつき、三毛猫は、左足の脛にピタッピタついた。

だが、それにもまつたく気づかずに、春の考え事は続く。

（一）（二）は神奈川やし……神奈川いうたら、鎌倉……鎌倉幕府……頼朝と義経……北条政子と静御前……）

「マサ」「と……シズカ。うん、ええかも……ん？」

地面を向いていた顔を少しだけ上げて、春は猫たちが自分にくつついていることに気付く。

「あ、ああ……すまんな、放つたらかしにしてしまひ……」

春はそう言つて、猫たちと再び戯れようと手を伸ばした、そのとき……

「おーい、ちょっとといいかあ？」

背後から、突然声が聞こえる。それが自分に向けられたのものかと思い、春はしゃがみ込んだまま、背後に目を向ける。猫たちは少年たちを見ると、すかさず背を向けて走り出して行つた。

「あ……はあ……」

猫たちが離れて行つたのがわかり、思わず溜め息を吐いてしまつた。目を向けた先に立っていたのは、黒い学生服を着た三人の少年。その先頭に立つ、裾が腰より少し上の辺りまでしか無い学生服

を着た、茶髪の軽そうな少年は、見下すかのように春に視線を向け、その後ろにいる一人……顔が瓜一つで、髪の色以外は一致しているところを見ると、双子であると思われる金髪と銀髪の少年は、不安気な表情で立っている。三人とも、学生服の襟には、一年生であることを示す、英数字の”1”を象った襟章を付けていた。

「えつと……俺？」

自分に声をかけたに違いないと思いつながらも、そうでないことを心中で祈りながら、春は自分を指差してそう言つてみた。

「……そうそう、俺あ真奈浦中央の陣内つて者なんだけどさあ、ちよつと頼みた」ことがあるんだよなあ……」

真奈浦中央高校……真奈浦市南部から麻芽橋を渡つてすぐのところにある朝永地区に存在する男子校である。

「……むう……」

春は、関わりたくないといつ気持ちから溜め息を吐きそうになるが、これまでの経験から、それが聞かれたら面倒なことになると瞬時に判断し、溜め息を堪えながら立ち上がる。

「うわあ……」

「やつぱり……背え高つ……」

陣内の後ろにいる双子は、立ち上がった春を見て、口を半開きにしている。その表情は、更に不安の色を濃くしていく。

（うつこうでかいヤツに限つて、見かけ倒しだつたりするんだよなあ……）

心中で意地悪くそんなことを言いながら、陣内は話を続ける。

「頼みたいことってのはあ……」このことなんだけどさあ……

自分より大分背の高い春の顔を見上げながら、それに驚く」ともなく笑みを浮かべた陣内は、地面を指で差し示す。

「…………」

「そ、」

春もまた、地面を指差し、首を傾げながら陣内の顔を見る。

「ぶつちやけた話……ここ、なんか快適そうだからさあ、俺らの溜まり場にしてえんだけど……良いよなあ？」

そう言つて、春の顔を見上げる陣内の目が、獲物を見つけた猛禽類のように鋭くなる。その目は、拒否は許さないといつ明確な意思を示していた。

（勝手にしたらええ……って言つたら、もうここには近寄れん……ここで、あいつらと遊べんようになつてしまつ……でも、こういうヤツらとはもう関わりとうないし……）

高校入学から一ヶ月半……あまり楽しくはないが平穀だった春の高校生活に、急激な変化が訪れようとしていた。

「セニゼニ、愉しそうでくれよな……」

無言のまま、陣内の”頼みごと”に応じるべきか悩み続ける春……そんな彼の様子に業を煮やしたのか、陣内は突然、両手で春の胸ぐらを掴み……

デニッシュ

ツ・ツ・ツ

春の体を壁に押し付けた。一度考え込むと周りが見えなくなることが多い春は、突然のことに思考が追いつかず、なすがままであつた。

「い、い、よ、なあ？」

薄つすらと笑みを浮かべ、一言一句を強調して語り陣内は、胸ぐらを掻んだ手の握力を強め、顔を春に近づける。

「  
駄目や

考えをまとめた春は、陣内を睨みつけて言い放つ。

「おも」

春の言葉を聞いた陣内は小さく溜め息を吐き、胸ぐらを掴んだ。手を離しかと思つと、すかさず春の頬田掛けて拳を叩き込んだ。

「もう一回聞くけど……良いよなあ？ 駄目つてこたあ無いよなあ……」  
なあ？」

再び胸ぐらを掴み、陣内は顔をグイッと近づける。その顔からは、笑みが消え、目付きは鋭さを増していく。

「……なんべん聞かれても……駄目なもんは駄目や……」

「……しうがねえなあ……おーい二人とも……こいつ抑えろ……」

「お、おう……」

「わ、わかった……」

陣内の言葉を聞いて、その後ろでハラハラとした様子で見ていた双子は、それぞれが春の両隣に移動して、腕を掴んで春を膝立ちにさせる。春は抵抗しようとせず、膝立ちの姿勢で俯いていた。

「おら、顔上げる……ん?」

俯いた顔を上げさせようと、春の長い前髪を掴んで引っ張った陣内は、あることに気付く。

「なるほど……変な髪型だとは思つたけど、そういうことかあ……」

「……くつ……」

春の前髪を掴んだまま、陣内はニヤリと笑つた。陣内の視界に写る春の顔の、長い前髪で隠されていたところには、大きな傷痕があつた。その切創は、眉の上辺りから、頬まで真っ直ぐに走り、瞼は開かなくなっていた。

「見られんのが恥ずかしくて隠してたつてのかあ?乙女かよお前はあ……クッククッ……」

「……どうでもええやろ……」

心底馬鹿にしたように笑う陣内に対し、春は、睨みつけながら静かに咳く。

「確かに……どうでもいいやあ……」

そう言つて陣内は、前髪を掴んだ手を放すと同時に、春の腹に

蹴りを放つ。

「うつ……くう……」

腹部への衝撃に、思わず苦悶の表情を浮かべる春……そんな春の様子を、陣内は心底楽しそうに見つめる。

「さて、と……せいぜい、愉しませてくれよな……」

これから、田の前にいるヤツを好きだけ痛めつけることが出来る……そう考えただけで、陣内の加虐心には火が点き、その火は瞬く間に、大きく禍々しい炎となっていく。

だが春は、これから自分が受ける暴力に対する恐怖は無い。恐

れているのは、また別の事……

（……絶対に耐えたる……そつせんと俺の居場所は……せやから、耐えられんようになつてブチ切れるんだだけは、絶対あかんのや……）

感情の暴走……かつての自分は、それが原因で多くの人たちを傷付け、春自身も多くの傷を負い、しまいには右目の光を失つた。

（……負けへん……暴力にも、俺自身の感情にも……）

顔を地面に向けた春は、そつ心に強く言い聞かせながら、顔を上げた。

「あ……加奈江くん？」

「そこのお嬢さんたち……良かつたら一緒に、ケーキバイキングにでも行きませんか？」

「……へ？」

「な、なに？」

冬樹はすぐ近くを歩いていた一人の少女……愛奈と加奈江の前に、軽快な動きで飛び出してきた。そんな冬樹を、愛奈はキョトンとした顔で見つめ、加奈江は戸惑いながらも睨みつける。

「あれ？俺のこと知らない？南高の桜庭冬樹って言えば、この辺りやあ有名だと思つんだけど……」

そう言つて冬樹は、自慢気に大きく出た腹を叩いて見せる。

「……知つてる？加奈江ちゃん……」

「いや、全然知らないけど……」

愛奈と加奈江は、お互いに顔を見合させて首を傾げる。

「なるほど……それより、これから予定が無いなら、ひょひつと付き合わないか？」

冬樹は軽い調子で言いながら、一歩歩み寄る。

「あ、あの……えっと……」

「悪いけど、急いでるからこれでー！」

狼狽する愛奈の手を掴み、加奈江は冬樹の横を走つて通り過ぎて行つた。

「……慣れない」とするもんじやねえな……恥ずかしいつたらねえぜ……」

その場に立ち尽くし、冬樹は思わず苦笑してしまつ。  
(タケたちとつむるものも楽しいんだが……やっぱ、物足りねえな……)

「はああ……」

ガックリと肩を落とし、冬樹は大きな溜め息を吐いた。

「よし、今度こそ帰るつ……帰つて勉強だ……」

そう自分に言い聞かせるように呟くと、冬樹は早足で歩き出した。

「はあ、はあ……」

「加奈江ちゃん……大丈夫？」

全力で走ったためか、息を切らしている加奈江を、同じ距離を走つたにも関わらず、特に疲れた様子も見せない愛奈は心配そうに見つめる。冬樹を置いて走り出した一人は、麻芽橋の前まで来ていた。

「あ、大丈夫……はあ……ちよつと疲れただけ……」

加奈江は息を整えながら、愛奈に微笑んで見せた。

「そ、そう？ それならいいんだけど……」

「とにかく……はあ……少し休ませて……」

未だに心配そうな様子の愛奈をよそに、加奈江はその場で腰を降ろした、その時……

「うわああ……！」

「……！」

「どこからか聞こえた悲鳴に、愛奈は思わず背を震わせた。

「今ひとつ……」

「あそこから聞こえたけど……」

愛奈と加奈江は顔を見合せると、橋の下に視線を向ける。

「おわああ……！」

「……また……」

「うん……つて、愛奈……？……もあ……」

悲鳴が再び聞こえたと思いきや、愛奈は河川敷へと降りて行く。

加奈江は驚きながらも立ち上がり、愛奈の後について行つた。

「……いつたいなにが……！？」

悲鳴の聞こえた場所まで来た愛奈の視界の先には、顔面を額より流れる血で朱に染めた春と、血が滴るモンキーレンチを片手に驚いた様子の陣内が向かいあつていた。緩やかな流れの利保川には、陣内の後ろに控えていた双子の少年が腹をおさえて苦し気な表情で倒れていた。

「ゆ……雪村……くん？」

眼前の光景に怯えながら、クラスメイトの名を呟く。

「…………え？」

その呟きが聞こえたのか、春は無言で、ゆっくりと声のしたほうに顔を向けた。暗く、それでいて澄んだ瞳が一人の少女の姿を捉えたとき、春の表情に驚愕の色が浮かんだ。

「あ……俺……」

なにか言おうとした春だったが、直後、世界が大きく揺らいだかと思うと、目の前に石が敷き詰められた地面が迫つてくる。そのまま前のめりに倒れしていく春だったが……

（あれ……なんか、柔らかい……）

地面に倒れた筈の体に伝わってきた感触は、思いのほか柔らかく暖かいものだった。

薄れゆく意識のなか、視界に映つたのは、いつの間にか自分の体を支えていた愛奈の、艶のある腰辺りまで伸びた黒髪だった。

そして、愛奈から伝わる暖かさに包まれたまま、春は意識は深い闇の中へと沈んでいった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1977z/>

真那浦南の不発弾(ダッド・ボーイ)

2011年12月21日10時45分発行